慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フアン2世治世下(1406-54)におけるカスティーリャ詩の理論化
Sub Title	Teorización de la poesía castellana bajo el reinado de Juan II (1406–54)
Author	瀧本, 佳容子(Takimoto, Kayoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.31 (2016.) ,p.103- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20160531-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フアン２世治世下（1406-54）における カスティーリャ詩の理論化

瀧本　佳容子

０．はじめに

現在にまで影響を及ぼしているヨーロッパの文芸の大きな動きを過去をさかのぼってたどって行くと，ダンテやペトラルカやボッカッチョが自分たちの母語で，叡智に満ちた風雅な韻文で愛を語ったり，ひとりの人間としての感情や感覚を親しい人に宛てて書いたり，ありとあらゆる身分の人びとの生の営みを生々しく描き出した時代に行き着く。イタリアで起こったこの文芸の革新は他の地域にも波及し，何世紀もかかって大きなうねりとなって，俗語と呼ばれていたことばが日常生活においても学問においても完全にラテン語を凌駕した。これが近代を特徴づける現象のひとつである。

カスティーリャにおいて公的な場で俗語の使用が始まったのは13世紀のアルフォンソ10世（Alfonso X，在1252-84）の治世下だが，これは，すべてのカスティーリャ人が理解できるカスティーリャ語を公用語とすることが実益をもたらすという実用的理由によるもので，そこにナショナリズムのたしかな表明は認められるものの，俗語が文芸のことばとして高められたのではない。カスティーリャ語がもはや劣ったことばではなく古典語に並びうる価値を持つと宣言したのは15世紀前半の文人サンティリャーナ侯イニィゴ・ロペス・デ・メンドーサ（Íñigo López de Mendoza, Marqués de Santillana, 1398-1458）である。侯はポルトガル元帥のペドロ（Pedro

de Portugal, 1429–66）に献じた自作詩集への序文『序 兼 書簡』（*Proemio e carta,* 1445–49）において，カスティーリャ語による叙情詩を称揚して古代地中海世界から同時代に至るまでのあらゆる詩の系譜に位置づけ，初めてカスティーリャ語に古典語に匹敵する地位を与えた。

韻文であれ散文であれ，文章の書き手が自らの文章と内容を洗練させ，さらなる高みや前衛を目指すのは当然のことである。とはいえ，サンティリャーナ侯が宣言を行った15世紀は，カスティーリャ語文芸に刷新をもたらすさまざまな現象が連続して起こった，まさに近代の始まりを画する時代であった。J. Weiss が言うように「（カスティーリャの）15世紀における文学理論の歴史は（…）新しく始まった事どもの歴史という感を与える」[(1)]。これはもちろん偶然ではなく，さまざまな面における世俗的なものの台頭という中世末期のヨーロッパ全体に見られる趨勢の中で起こったことである。そして，15世紀でも特に前半のフアン２世（Juan II，在位1406–54）の治世に，サンティリャーナ侯をはじめとする貴族などがこぞって叙情詩を書き始めると同時に，カスティーリャ語を称揚したり批評・分析の対照とするようになった。このようなことばの理論化の試みは，Weiss が洞察するように，社会的関係確立の意図に他ならない[(2)]。つまり，古典語や他の俗語との差異や連続性を根拠にして，カスティーリャ語文芸を社会全体やひいては人類史という普遍の中に位置づけようとする試みなのである。このような視点に立ち本稿では，15世紀前半のフアン２世治世下で展開された，カスティーリャ語とカスティーリャ語による文芸に関する言説の持つ社会的意味を論じる。

---

(1) Weiss, Julian, *The The Poet's Art. Literary Theory in Castile* c. *1400–60,* Oxford, 1990, p. 233.

(2) Weiss, Julian, "Literary Theory and Polemic in Castile, *c.* 1200–*c.* 1500", in *The Cambridge History of Literary Criticism, Vol. 2. The Middle Ages,* ed. by Alastair Minnis & Ian Johnson, Cambridge, 2005, p. 496.

１．フアン２世の治世：トラスタマラ革命と宮廷文化

イタリア人文主義の真骨頂である古典文献学が本格的にカスティーリャに導入されるには，アントニオ・デ・ネブリハ（Antonio de Nebrija, 1441-1521）がイタリア留学から帰国してラテン語の研究書を発表し始める1480年代を待たなければならなかった。そのため，ネブリハ登場以前のカスティーリャは，いわゆる俗語人文主義が展開され[3]，「人文主義的感性の広がり」[4]が認められる，「スペインにおける文芸上のルネサンスの始まりを画する時代だった」[5]。上述したように，この15世紀にカスティーリャ語に理論武装をほどこして権威化しようとする試みが始まって重要な論考が書かれたり作品が編纂されたりしたのだが，その成立時期には明確な分布が認められる。エンリケ・デ・ビリェナ（Enrique de Villena または Enrique de Aragón, 1384-1434）の『作詩の技法』（*Arte de trovar, c.* 1433），フアン・アルフォンソ・デ・バエナ（Juan Alfonso de Baena，生没年不詳）が編纂した『バエナのカンシオネロ』（*Cancionero de Baena,* 1445-54），および，1445年から1449年の間に書かれたと推定されるサンティリャーナ侯『序 兼 書簡』などは，フアン２世の時代である15世紀前半に集中している。また，俗語とラテン語に関して神学者アロンソ・デ・カルタヘナ（Alonso de Cartagena, 1384-1456）がスコラ学の立場から議論を繰り広げたり，15世紀を代表する壮大な政治的寓意詩『運命の迷宮』（*Laberinto de Fortuna,* 1444）がフアン・デ・メナ（Juan de Mena, 1411-

---

(3) Lawrance, Jeremy N., “Humanism in the Iberian Peninsula”, in *The Impact of Humanism on Western Europe,* ed. by Anthony Goodman & Angus MacKay, London & New York, 1993 (2nd edition), pp. 220-58. 瀧本佳容子「カスティーリャ語の権威化―15世紀のカスティーリャ文学をめぐる試論―」『日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第44号（2012），23-25頁。

(4) Santiago, Ramón, “La historia textual: textos literarios y no literarios”, en *Historia de la lengua española,* coord. por Rafael Cano Aguilar, Barcelona, 2008 (2ª. edición actualizada), pp. 535.

(5) Lawrance, 1993, p. 222.

56）によって書かれたりしたのもフアン２世の治世下だった。その後のエンリケ４世（Enrique IV，在位1456–74）の時代は，君主の政務怠慢と王位継承問題の紛糾によって内政不安が極度に高まって内戦に至り，国を覆う不安と憂鬱が文芸作品にも反映した。そして，国内の平定を達成したイサベル１世（Isabel I，在位1474–1504）と夫のアラゴン王フェルナンド２世（Fernando II，在位1479–1516）のカトリック両王時代の1492年に至っておよそ半世紀ぶりに人文主義者ネブリハによって書かれたカスティーリャ語論こそ，他ならぬ『カスティーリャ語文法』（*Gramática sobre la lengua castellana*）だった。

文化を促進する要素のひとつが社会状況であるのはもちろんだが，15世紀におけるカスティーリャ語文芸の変容や発展の背景となったのは激動に満ち満ちた社会だった。14世紀末に正統な君主を謀殺することによって王位についたトラスタマラ朝は，まず自らの正統性を証明するという難題の解決を迫られたうえ，王朝交代に伴って台頭したいわゆる新貴族との権力闘争に明け暮れた。こうして，15世紀末のカトリック両王期に至るまでのカスティーリャは，ほぼ一世紀を政情不安のうちに過ごした。そして，R. Eberenz や R. Cano Aguilar などの文献学者は，この危機的状況こそがことばと文化を発展させた要因だと強調した(6)。この文献学的視点からの指摘に付け加えなくてはならないのは，フアン２世が果たした役割である。荒々しい闘争の空気が満ちていたカスティーリャにおいて，この君主のもとでは文化の中心として宮廷が機能し始め，貴族は風雅の追求にいそしみ始めたのである。

トラスタマラ朝の創始者エンリケ２世（Enrique II，在位1369–79）に続く２人の王たちの治世はともに短かった。フアン１世（Juan I，在位1379–90）は11年間統治して32歳で薨去し，13歳という若さで親政を開始した次のエンリケ３世（Enrique III，在位1390–1406）は，いくつかの刷

(6) Santiago, *op. cit.,* p. 533; Cano Aguilar, Rafael, *El español a través de los tiempos,* Madrid, 1988, p. 193.

新的政策を実施したものの27歳という若さで世を去った。トラスタマラ朝初代３人の統治がすべてこのように短く，かつ，残された後継のフアン２世が２歳にも満たない幼児だったことは，いわゆるアラゴン派貴族と王権側の対立を長期化させ，政情不安に拍車をかけた。さらに，親政を開始したフアン２世は政務にはまことに不向きで，統治をすべて下級貴族出身の寵臣アルバロ・デ・ルナ（Álvaro de Luna, *c.* 1390-1453）に任せてルナを増長させた。とはいえ，君主の権力が常に脅かされる状況下にあっても，王権の絶対性という理念は保たれ，有力貴族たちが王室の利権を損ないつつある状況下でも，財政・司法・議会などの国の基幹となる制度は統制の度を強め，国政全体は後の絶対王政につながるような王権強化の方向に徐々に向かっていった。さらにフアン２世は，統治をかえりみなかった代わりに文芸には自ら熱心に取り組む風流人であり，またその寵臣ルナが怜悧狡猾な政治家であると同時にフアン２世ともども詩作も行う一面を持っていたことが，カスティーリャ文芸には途方もない幸運をもたらした。

F. ペレス・デ・グスマン（Fernán Pérez de Guzmán, *c.* 1390-1460）が1450年頃に著した *Generaciones y semblanzas* は，サンティリャーナ侯らの詩論の溌剌とした勢いとは対照的に，国政の中枢を蝕む退嬰の気配を濃厚に反映した暗い色調に彩られた作品だが，そこでフアン２世は次のように描かれている。

> ご性格が特異で不可思議だったので，これについては詳しく説明する必要がある。というのは，慎重で思慮深い話し方をされる方であり，また，人びとのことをよく知っていて，誰が話し上手だとか，注意深い話し方をするだとか，面白い話をするだとかいうことをよく分かっておられた。思慮深く面白い人の話を聞くのがお好きで，こうした人びとから聞くことはよく分かっておられた。ラテン語の会話と読み書きがおできになり，読書も大いにされ，書物や物語をたいそう好まれ，韻をふんだ短詩の朗読を聞くのが大いにお気に入りで，短詩づくりに

ふける喜びにも親しんでおられた。楽しく的確なことば使いを聞くことを大いなる喜びとされ，王ご自身も巧みなことば使いをされるのだった。狩猟によく行かれ，狩猟の技術全般をとてもよくご存知だった。音楽の造詣も深く，歌や演奏もお上手で，馬上槍試合も巧みになさった。

これらの風雅なことすべてについては理性的なところがおありだったが，すべての人にとって，特に王にとって必要なものである本当の美徳に関しては，たいへん不十分な方であった。信仰に次ぐ王の主たる美徳というのは，自らの王国の政務と統治に巧みで熱心なことである（…）。この王はこの美徳を欠いておられたが，上述のような風雅の持ち主ではあられたので，そのご治世下のカスティーリャには，過去200年の間の王たちの時代にはなかったような多くの争乱，騒動，害悪や危機があったのにもかかわらず，統治について考えたり執務したりすることには１時間も我慢がおできにならなかったため，ご自分の身と名声と王国とを危険にさらされることになったのであった。王国の統治における怠慢と先送りは甚だしく，楽しく愉快なことには熱中なさったが，有益で立派なことにはご興味がなく，理解しようとすらなさらなかった(7)。

カスティーリャの文芸には幸運をもたらしたが，王国にとってもフアン２世にとっても不運だったのは，芸術には理解も才能もある一方で政務能力をまったく欠いたこのような人物が王位継承者に生まれついたことである。ペレス・デ・グスマンは，フアン２世が，音楽・狩猟・槍試合のような貴族の伝統的教養に加えてラテン語に堪能で読書も好み，ことばにはきわめて敏感で，詩作にふけって自作の詩を取り巻きたちと朗唱し合って楽しんでいた様子をじゅうぶん描き出している。そして，このような書物に

(7) Pérez de Guzmán, Fernán, *Generaciones y semblanzas,* ed. de Robert Brian Tate, London, 1965, pp. 38–39.

耽溺しことばに深い関心を示すことが，君主としては「特異で不可思議（estraña e maravillosa）」だと見なされたことも分かる。

２．教育の伝統と貴族の理想の交差点

ヨーロッパ中世末期の文化的特徴のひとつに，従来は聖職者に支配されていた学識や読み書き能力の獲得が俗人にも広がったという現象がある。この最初の中心的担い手となったのは大学（特に法学部）をはじめとする学校教育を受けた層で，彼らが，官吏や公証人といった公職についたり，貴族や有力者に私的に雇われたりすることによって，かつては教育の場においてのみ実践され継承されてきた学問の手法が，内容・形式ともに教会や教育機関の外部の領域にも少しずつ浸透し始めた。浸透の結果が顕著にあらわれたのは貴族および彼らに伺候していた人びとだった。書物に耽溺し詩作にふけるフアン２世が，保守的観点からすると「特異で不可思議」だったように，伝統的な貴族の理想像には文芸（特にラテン語や詩）の素養は含まれていなかった。しかし，風雅なことばでによる詩などを書いたり詠みあったりすることが貴族のあいだで流行になり，この風潮づくりにフアン２世の宮廷はもちろん大いに寄与し，先に述べたように，カスティーリャ語の理論化に先鞭をつけた論考はいずれもフアン２世の治世化で着想された。カスティーリャ語の『作詩の技法』の著者エンリケ・デ・ビリェナ，勅命により『バエナのカンシオネロ』を編纂したフアン・アルフォンソ・デ・バエナ，および『序 兼 書簡』の著者サンティリャーナ侯の三文人は，学校教育の形式・内容の受容と貴族の理想の変容が交差するところで誕生したのである。

エンリケ・デ・ビリェナは15世紀初頭のカスティーリャにおいて本格的人文主義の精神に達していた唯一の文人だと見なされている。母はカスティーリャ王エンリケ２世の庶子，父方の筋ではアラゴン王ジャウマ２世（Jaume II，在位1291-1327）の玄孫というカスティーリャとアラゴン双方

の王族の血筋に生まれた。生後間もなく，カスティーリャ軍総司令官だった父のペドロ（Pedro，？ -1385）がアルジュバロータの戦（1385）で死んだため，祖父アルフォンソ（Alfonso，1332-1410）のもとで養育された。アルフォンソはジャウマ 2 世の孫で，初代カスティーリャ軍総司令官を務めたほか，ガンディア公，ビリェナ侯などの爵位の持ち主だった。エンリケは祖父を通じて，ジュアン 1 世（Joan I，在位1387-96）およびマルティー 1 世（Martí I，在位1396-1410）時代のバルセローナの宮廷に親しんだ。この時期のアラゴン宮廷では，イベリアでもっとも早く人文主義の受容が始まると同時に，本場の南仏では衰退に向かい始めたオック語文学に影響された詩作の習慣が成熟に達し，中世後半における文化の絶頂期に入るところであった。同時に，アラゴン出自の貴族たちがカスティーリャにおいて公然と誇っていた権勢は，エンリケ 3 世の早すぎる死（1406）に始まる政治状況の変化によって弱体化し始め，祖父は公の場から退いた。

以上のようにエンリケは，当時としては最高に恵まれた環境で幼少期を送ったのだが，成年に達して貴族として独り立ちした後は，目まぐるしく変化する政治社会的状況のもと，権力闘争や政務の遂行には能力を欠き，肩書や財産を剥奪された挙げ句，文学の前衛を追求する姿勢が異端視されるに至った。そのため，蔵書は死後に勅命で焚書に処され，作品にも保全の努力が払われずにごく一部のみが今日にまで伝わり，18世紀になってやっと名誉が回復された。そして，実際のビリェナは前述のペレス・デ・グスマンの目には次のように映った。

> （…）経験が彼の中に示したところからすると，騎士道，ましてや世俗的なことや宮仕えよりは，生まれつき勉学や学芸に向いていた。そのため（学芸）の教師がいなかったために，誰一人として彼に勉学を強制せず，それどころか，彼の養育にあたっていた彼の祖父の侯は彼を騎士にしたいと思った。（しかし）彼は，幼少時に，普通は子供たちが無理に学校に連れて行かれる時に，彼は，皆の者の想像に反し，

自ら勉学に取り組んだ。鋭く高い知能の持ち主だったので，教えられる学問や学芸を簡単にものにしてしまい，生まれつきの才能の持ち主だとよくわかった。

まったく自然というのは大きな力を持っており，神の特別な恩寵無しには自然に逆らうことは難しく困難なことである。

また一方，このエンリケという方は，騎士道のみならず，世俗的な諸事や家政・財産の管理とはまったく無縁で不向きだった。その不器用で不適当な様は大いなる驚嘆にも値した。そして，数ある科学や学芸の中でも占星術に打ち込んだため，地上のことよりは天上界のことの方に詳しいと，彼を嘲笑する者もあった。

そして，この（学芸への）愛と書物によって，立派でキリスト教的な学問にとどまらず，夢・くしゃみ・さまざまな徴候その他の，王家の子弟ましてやキリスト教徒にはおよそ相応しくない事どもを占ったり解釈したりするという，恥ずかしく安っぽい技に夢中になった(8)。

そしてこのために，当時の王たちからは軽んじられ，騎士たちからはほとんど敬意を払われなかった。とはいえ，詩や壮大な物語を巧みにものし，さまざまな学芸の豊富で広範な知識を持っていた。多くのことばも話せた。大食漢で女性好きだった。

ビリェナは，アラゴン宮廷において詩作を推進したり，ダンテの『神曲』やウェルギリウスの『アエネーイス』をカタルーニャ語やカスティーリャ語に翻訳して註釈を施したりすると同時に，自らも詩や散文の作品を執筆した。重要な作品のひとつである『作詩の技法』(9)はアラゴン宮廷において受容されビリェナも親しんだプロヴァンス詩の系譜にカスティーリ

(8)　Pérez de Guzmán, *op. cit.*, pp. 32-33.

(9)　本稿では，*Obras completas, I,* ed. de Pedro M. Cátedra, Madrid, 1994から引用する。また，中岡省治による和訳（「エンリケ・デ・ビリィエナ『作詩の技法』*Estudios Hispánicos*，第26号（2002），９-34頁）も適宜参照する。

ャ語の詩を位置づけようとする試みだが，もっとも重要な点は，その試みを科学的な分析に基づいて行っていることである。『作詩の技法』冒頭でビリェナはまず「作詩の技法（la arte del Trobar）は古くカスティーリャでは〈華麗なる技法（la Gaya sciençia)〉と呼ばれた」[10]と述べ，作詩法を技法，すなわち定型化しうるものだと定義する。そのうえで，詩作の広まりに伴って作詩の技法が尊重されなくなった状況を嘆き，そこに執筆理由があると述べる。

> 作詩法が尊重されなくなったことにより，皆がこぞって作詩に手を染めているが，単に音節の数を等しく保ち句を反復して一定の調子に合わせるのみで，きちんとした韻律には他のことを守らなくてもよいという無頓着ぶりである。
>
> そのため，明晰な才能と好い加減なものの区別がなされていない[11]。

続いて，本書を捧げた相手であるサンティリャーナ侯とその詩を讃えるが，サンティリャーナ侯のような才能ある詩人が正しく評価されるためには正しい作詩法の普及が不可欠であり，この点においてもサンティリャーナが指導的役割を果たすべきだと主張する。

> (…) 作詩法が尊重されなくなったことにより，貴殿は貴殿の作品の聴き手に，自然が貴殿のまったき才能に与えた優れた創意を，これらが着想された際の姿そのままで広めることがおできになりません。ついては，貴殿が上述の書物（引用者注：作詩術のこと）を読んで，詩人を自称する他の王国の人びとすべてが光と知識を得る源になられますように。さすれば，彼らは本当に詩人になれましょう[12]。

---

[10] Villena, *op. cit.*, p. 353.
[11] *Ibid*., p. 355.
[12] *Ibid*.

続いてビリェナは，フランスのトゥールーズで始まった詩の審査制度コンシストリ（『作詩の技法』中では consistorio，もとはオック語 consistori）[13]や詩論がアラゴン王国に伝播した経緯を述べた後に，アラゴンでもコンシストリが創設されて一定の手続や規則に基づいた詩の競作が開催された模様を詳しく語る[14]。後る部分は（今日に伝わっている部分の残り，という意味だが），カスティーリャ語の文字と発音に関する，古代にまでさかのぼる考察を含んだ論考にあてられているが[15]，壮大な文法書の始まりを思わせるこの音韻論を開始するにあたってビリェナは，イングランドの学者ウォルター・バーレイ（Walter Burley，1275-1357）の次の文章を引用する。

> 学問とは不動で真実なる事どもの完全な秩序である[16]。

理論化によって詩に価値を与えるというビリェナの意図は詩論全体を貫いている。

> この詩学が人びとの生活にもたらす利益はまことに大きく，無聊を慰め，豊かな頭脳を品位ある学究に没頭させるので，（引用者注：フランス以外の）他の国々も詩論の学派を持ちたいと望んで自国での形成につとめたのである。そしてそのために，詩論は世界のさまざまな場所へ拡められたのである[17]。

そしてこの主張は，世俗的な詩は何の寓意的意味も持たないというトマ

---

⑬ Bossuat, Robert et al. (dirs.), *Dictionnaire des lettres françaises Le Moyen Âge,* Paris, 1964, pp. 329-30.

⑭ *Ibid.,* pp. 355-59.

⑮ *Ibid.,* pp. 359-70.

⑯ *Ibid.,* p. 359.

⑰ *Ibid.,* p. 356（下線部引用者）.

ス・アクイナスの論を根拠にして詩の価値を認めないアロンソ・デ・カルタヘナなどの神学者への反論であった。ナバーラ王に捧げた『アエネーイス』カスティーリャ語訳への序文において，ビリェナはより明快にカルタヘナに反論し，ウェルギリウスは詩人かつ哲学者として大いに評価されなければならないと主張した。ビリェナがカスティーリャ貴族たちのために行った『アエネーイス』の翻訳は，カスティーリャ貴族の間に読書の習慣が広がった証左のひとつである。また，翻訳者によって序文，解題，各連の標題などが加えられるという，自由学芸の基礎をなす文献註解の手法が用いられていることも注目に値する。さらに，Weiss が看破したように，ビリェナによるウェルギリウス称揚は，詩と詩人を讃えることだけが目的ではなく，自分自身の文人としての野心に彩られたものでもあった。イタリアの人文主義者たちと異なって，ビリェナには国家への詩の奉仕という視点が欠けてはいたが，ペレス・デ・グスマンらの証言や現実面における不器用さをもとにしてビリェナが政治的に無能だと判断するのは間違いである[18]。詩の理論化という試みを通じて，自らを文人だと認識するビリェナは，詩の書き手にもその品位にふさわしい社会的地位を与えようと試みたのである。

生前も死後も正当な評価をなかなか与えられなかったビリェナにとって幸運だったのは，文人としての資質がある人物によってすぐ後世に伝えられたことである。その人物とは，ビリェナが『作詩の技法』を献じた相手で，文武の両面でカスティーリャの代表的貴族だったサンティリャーナ侯である。

サンティリャーナ侯は中世末期のカスティーリャでもっとも重要な功績を残した文学者のひとりで，トラスタマラ朝開始に伴って台頭した「新貴族」のなかでも大きな影響力を誇るメンドーサ家の首長として，フアン 2

[18] Weiss, 1990, pp. 18–19.

世時代の軍事・政治で陰に陽に活躍した。フアン２世治世下の政治の基軸を成したのは，フアン２世の寵臣アルバロ・デ・ルナとアラゴン派貴族との確執[19]で，これに由来する数々の争乱に他の貴族たちは，時には加担し時には曖昧な態度で臨みつつ自らの地位の保全と利益の追求も怠らず，イサベル１世による国政平定までの動乱期を耐えた。このような２つの継承戦争をはじめとする大規模な政変が相次いだ中世から近世への過渡期を，狡猾にくぐり抜けた当時の典型的な高位貴族のひとりがサンティリャーナ侯で，その怜悧さは次世代におけるさらなる繁栄に家門を導いた。

政治・軍事においてよりもサンティリャーナ侯に大きな名声をもたらした文芸活動の素地が培われたのは，フェルナンド・デ・アンテケーラのアラゴン王即位に伴って主席酌人として出仕したアラゴン宮廷においてであった。そこで侯は，エンリケ・デ・ビリェナをはじめとするカタルーニャの詩人たちと知り合い親交を深めた。イタリアの書籍商と直接取り引きして古典文学を含める多くの書物を集め，自らも韻文と散文の両方で作品を書いた。カスティーリャの侯の邸宅は学者や貴族が集って文学の話に花を咲かせるサロンになった。その様子を，フアン２世からイサベル１世までの三代のトラスタマラ朝君主に官吏として仕えたフェルナンド・デ・プルガール（Fernando de Pulgar, 1420/30?-1492?）は，『カスティーリャ顕臣列伝』（*Claros varones de Castilla*, 刊行1486）において次のように伝えている。

---

⑲　要はトラスタマラ家のお家騒動なのだが，王国最高の地位にあった家門なので必然的に国政全般に影響が及んだ。直接の発端は，エンリケ３世の弟で権力欲の強いフェルナンド・デ・アンテケーラ（Fernando de Antequera, 1380-1416）と，エンリケ３世未亡人カタリーナ（Catalina, 1373-1418）の間に生じた確執である。フェルナンドがカスペの協約（1412）によってアラゴン王位につき，後のアルフォンソ５世（Alfonso V，在位1416-58）をはじめとする子女７人（いわゆる「アラゴンの王子たち」）が父の意を汲んでカスティーリャ政治で権勢を振るったため確執の規模が拡大し，フアン２世治下では，ルナとアラゴンの王子たち，およびそれぞれの支持派が鋭く対立した。

（…）（侯は）その生涯において２つの卓越した活動を行った。ひとつは軍事で，もうひとつは学術研究であった。軍事も研究を妨げなかったし，研究の方も，自宅で騎士や槍持ちと鍛錬を行う時間を侯から奪うことはなかった。（…）[20]

（…）多くの蔵書を持ち，勉学にいそしんだ。特に道徳哲学，外国の文献や古典を読んでいた。自宅にはいつも学者や教師を招き，自分がしている研究や読書の話を彼らとしていた。また，韻文と散文で，美徳を誘発し悪徳を抑制する術を教える論文を書いた。そして，このような事どもに余暇のほとんどを費やしていた。スペインの外の多くの国々で高い評価を得て名声も高かったが，多くの人々の間で持っていた名声よりは，知識人の間での評価の方が大きかった[21]。

サンティリャーナ侯が残した学術研究の成果のうちカスティーリャ文学史上もっとも重要なのは『序　兼　書簡』である[22]。ここでサンティリャーナは，古典古代から自分と同時代の諸俗語による詩までを同一の系譜に位置づけた歴史観を構築し，ギリシア語・ラテン語 対 俗語という二元論を排すると同時に，ビリェナのイデオロギーを継承して詩を「我われは俗語で〈華麗なる技法〉（gaya　sçiençia）と呼ぶ」[23]と述べた。サンティリャーナ侯の歴史観の独自性は，あらゆる詩は，韻律の洗練度に応じて「荘厳」（sublime），「凡庸」（mediocre），「最下等」（ínfymo）の３レベルに分けられると詩にヒエラルキーを導入したことだ[24]。このように俗語詩を歴史

---

⑳ Pulgar, Fernando de, *Claros varones de Castilla,* ed. de Robert Brian Tate, Oxford, 1971, p. 20.

㉑ *Ibid.,* p. 24.

㉒ 『序 兼 書簡』については，次も参照されたい：瀧本，前掲書，29–30頁。瀧本佳容子「初期ルネサンス期のカスティーリャ語文芸―世俗化と普遍への志向―」『日吉紀要 人文科学』第28号（2013），75–79頁。

㉓ López de Mendoza Íñigo (Marqués de Santillana), *Obras completas*, ed. de Ángel Gómez Moreno y Maximilian P. A.Kerkhof, Barcelona, 1988, p. 439.

㉔ *Ibid.*, p. 444; Weiss, 2005, p. 517.

化し，また学術として普遍化しつつ同時に階層化もしようとする試みを通じてサンティリャーナは，K. Kohut が指摘するように，詩に社会的身分を与えたのである[25]。換言すれば，サンティリャーナ侯の意図は，カスティーリャの文化および貴族にアイデンティティを与えることにあった。

サンティリャーナの詩論で際立つもうひとつの要素は，韻律と比喩に基づいた詩の美的価値の称賛である。サンティリャーナは次のように詩を定義する。

> 我われが俗語で〈華麗なる技法〉（gaya sçiençia）と呼ぶ詩とは，比喩を用いて有益な事どもを書くこと，（つまり）まことに美しい衣で覆われて隠され，真実の重みと調べに同調して編まれ，整序され，韻律を整えられた有益な事どもなのであります[26]。

> 天上的熱意，聖なる情熱，魂の飽くなき食料。（…）詩とは，比喩を用いて有益な事ども，まことに美しい衣で覆われて隠され，真実の重みと調べに同調して編まれ，整序され，韻律を整えられた有益な事どもを書くことなのであります[27]。

スコラ学を融合させたサンティリャーナの定義には，伝統への配慮というか名残が感じられる。詩は，中世を通じて文法および修辞学の一部を占めつつも，美的価値よりは道徳的・宗教的な有益性が重要視され，独自の価値が与えられたのは人文主義とルネサンスが充分拡がってからなのである[28]。とはいえ，サンティリャーナ侯がより強調するのは「美しい衣で覆われて隠された有益な事ども」よりも，美のほうである。サンティリャー

---

[25] Kohut, Karl, “La posición de la Literatura en los sistemas científicos del siglo XV”, en *Iberoromania,* N°. 7, pp. 81-82.

[26] López de Mendoza, *op. cit.,* p. 439 ; Weiss, 2005, p. 517. カッコ内引用者。

[27] López de Mendoza, *op. cit.*, p. 439. Véase también, Weiss, 2005, p. 516.

[28] Kohut, *op. cit.*, pp. 77-83.

ナ侯は，詩を，服飾・武術・舞踏などと同様の，宮廷人が実践すべき「愉しく面白い事ども」[29]のひとつだと見なし，次のように，美しいものを読み書くことの純粋な悦びを謳いあげる。

> 物質が形を求め，不完全なものが完全性を求めるように，この詩という技と華麗なる技法が求めたものは，ただ，高雅な魂の中にある優れた才知と気高い精神のみであった。(…)（詩が）空虚で軽薄なものだったり，そうなりがちだと，考えたり言ったりしたがる者たちは誤っている。(…) 学芸が望ましいものであるとすれば，キケローが望むような，もっとも有用で，もっとも高貴で，もっとも価値ある人間の技とは何であろうか。または，人類の想像力のうちもっとも宏大なものは何であろうか。そして，闇に閉じ込められた想像力をこじ開けるのは誰であろうか。光をあてるのは誰であろうか。韻文であれ散文であれ，甘美な雄弁術と美しいことば以外の何が，想像力をあらわし明白なものにするというのか[30]。

サンティリャーナ侯には，かつて「本を書くからという理由で批判された」[31]フアン・マヌエル親王（Don Juan Manuel, 1282–1348）に滲み出るルサンチマンは感じられない。サンティリャーナには貴族が詩作を行うことを正当化する必要はない。さらに，セビーリャの聖イシドルス（*c.* 556–636）以来の伝統を踏まえ[32]，韻律に最高の価値を認め，韻律を欠く

---

[29] López de Mendoza, *op. cit.*, p. 438.

[30] *Ibid.*, p. 439–40.

[31] Don Juan Manuel, *Libro infinido,* ed. de Carlos Mota, Madrid, 2003, p. 177.

[32] López de Mendoza, *op. cit.,* p. 440, n. 11;「散文とは連続した陳述であらゆる韻律の法則から自由なものである。(…) ギリシア人の間でもラティーニー人の間でも，古より散文よりは詩の方に注意が向けられていた。はじめ，すべては韻文で書かれていた。散文への配慮が生まれたのはずっと後のことである」(Isidoro de Sevilla, San, “38. Sobre la prosa”, *Etimologías,* I, ed. bilingüe de José Oroz Reta y Manuel-A. Marcos Casquero, Madrid, 1993, pp. 348–51)。

散文を韻律に対置させる。

> 韻律のない散文（soluta　prosa）と比べ，韻律の卓越と特権はいかほどか！（…）私は，ストア派の哲学者たちに倣って（…），韻律こそが（…），散文よりも，より完成されより威信（auctoridad）高いものだと宣言する[33]。

ここでサンティリャーナが対象としているのは，彼自身がイタリアからカスティーリャに移植しようと試みた叙情詩である。そして，侯の詩論の最後を飾るのは，フランシスコ・インペリアル（1350?–1409? 年）のような「私は（分類するとするならば），もはや短詩の作り手（dezidor）や吟遊詩人（trobador）ではなく，詩人（poeta）と呼ぶであろう」[34]同時代のカスティーリャ人たちであるが，この詩人たちも叙情詩の書き手のことである。さらに注目すべきなのは，ビリェナがあれほど讃えてプロヴァンズ以来の継続性を強調した「吟遊詩人（trobador）」とは異なる系譜に，サンティリャーナは自分たち「詩人（poeta）」を対置させていることである。このようにして，サンティリャーナ侯は，自分に先立つ時代のカスティーリャ語の詩人たち（“dezidor” や “trobador”）とは一線を画し，古代の詩人（poeta）[35]に拮抗する詩人（poeta）という概念を生み出した。これは極めて政治的態度である。ビリェナは言及していないが，イベリアにおいてプロヴァンス風叙情詩を取り入れたもうひとつのことばは，アルフォンソ 10世が聖母を讃える韻文に用いたガリシア－ポルトガル語だった[36]。サンティリャーナ自身も『序 兼 書簡』においてガリシア－ポルトガルの叙情詩について自らの読書経験を交えつつ述べている[37]。しかしこれは，その

⑶③ López de Mendoza, *op. cit.,* p. 440.

⑶④ *Ibid.,* p. 452. カッコ内引用者。

⑶⑤ 例えば，「ダンテが最高の詩人（poeta）と呼ぶホメーロス」（*Ibid*., p. 441）。

⑶⑥ López Estrada, Francisco, *Introducción a la literatura medieval española,* Madrid, 1987 (5ª. ed. revisada), pp. 387–92.

直後において論じている自分と同時代の「新しいカスティーリャの詩人たち（Los poetas castellanos nuevos）」と対比させ，カスティーリャの叙情詩の自律性を際立たせるためなのである。この詩論をポルトガルの王族出身である元帥ペドロに献上することによってサンティリャーナは，プロヴァンス，アラゴン，ポルトガルなどに対してカスティーリャの文芸は新しく優位を築いたのだと主張したのであった[38]。そしてサンティリャーナの矜持は，貴族を作り手の中心とする詩作の大流行に支えられたものであった。

3．カンシオネロ（cancionero）の世紀

15世紀のカスティーリャにおける叙情詩の大流行についてWeissは「めざましいほどの詩的創造性のほとばしりが見られ，少なくとも量において，ヨーロッパでほかに匹敵する国はなかった」ほどだと述べている[39]。これを裏付けるのが，主に15世紀から16世紀にかけて編纂された「カンシオネロ（cancionero）」と呼ばれる詩歌集に収録された大量の詩（特に叙情詩）であり，最初の代表的カンシオネロがすでに言及した『バエナのカンシオネロ』である。編纂者フアン・アルフォンソ・デ・バエナは，ユダヤ教徒の家に生まれ，フアン２世の宮廷へ書記および写字生として伺候し，おそらく蔵書掛もつとめた。また，勅命により編纂した『バエナのカンシオネロ』には自作の詩も80近く収めた。このカンシオネロは，ペドロ１世（Pedro　I，在位1350–69）からフアン２世の時代までの約百年間につくられた詩の集成である。

「カンシオネロ（cancionero）」は「詩歌集」という意味の普通名詞である。しかしカスティーリャ文学におけるカンシオネロとは特に，13世紀から16世紀にかけて編纂された，さまざまな作者の手による叙情詩を中心と

---

(37) *Ibid.*, pp. 448–50.
(38) Weiss, 2005, p. 518.
(39) Weiss, 1990, p. 1.

する詩歌集のことで，ルネサンス期のカスティーリャ文学を特徴づけるジャンルである。ここから「カンシオネロ風叙情詩（lírica cancioneril）」という用語もうまれ，これは叙情詩の中でも15世紀に書かれたものを指す。またカンシオネロという語は慣例的に，複数の作者（まれに単独の作者）の手による，比較的短い詩を集めたアンソロジーのみに対して使われる[40]。カンシオネロの数は写本のみのものと刊本をあわせて30にのぼる。そして，作品自体は失われて証言だけが残っているものも含めると，作者の数は800，作品数は7000を超える。また，15世紀の詩を含む作品に限っても，写本は約200，刊本は約230という膨大な数の史料が現存している[41]。代表的カンシオネロには，『バエナのカンシオネロ』のほかに『エストゥニィガのカンシオネロ』（*Cancionero de Estúñiga*，編纂1460-63），『王宮のカンシオネロ』，（*Cancionero de Palacio*，編纂15世紀中葉），*Cancionero general*（刊行1511）などがある。

叙情詩の作詩やカンシオネロ編纂は長いあいだ行われたのにも拘らず，叙情詩とカンシオネロの２つの語が結びつくと15世紀という限定された時代が特別視される。そしてこれには十分な理由がある。それはまず，カンシオネロと題された詩歌集が編纂され始め，叙情詩の量産が始まったのが15世紀だったからである。理由のうちでさらに重要なのは，カンシオネロの編纂が，第１章および第２章で述べたような15世紀カスティーリャ特有の歴史的条件においてのみ生じた現象だったことである。カンシオネロとは，15世紀のカスティーリャにおいて，こぞって詩作に手を染めた人々が

⑷⓪　例えば，フアン・デ・メナ（Juan de Mena，1411-56）の『運命の迷宮』（*Laberinto de Fortuna,* 1444）や『サンティリャーナ侯の戴冠』（*Coronación del marqués de Santillana,* 1438）のような大部の作品は「カンシオネロ風」と呼ばれはするが，これらを収めた写本あるいは刊本は「カンシオネロ」とは呼ばれない。

⑷⓵　Gómez Moreno, Ángel, “Cancioneros españoles del siglo XV”, en Ricardo Gullón (dir.), *Diccionario de literatura española e hispanoamericana,* Madrid, 1993, pp. 266.

おり，また，書き留めた作品を交換したり収集したりすることが習慣化したことの証なのである。15世紀に集団発生した詩と詩人の規模を，まがうことなき形で伝えているのがカンシオネロなのである。

4．結び

A. Deyermond は，15世紀のスペイン文学に関する2005年の論文で，1971年に刊行した自著『スペイン文学史 中世』から次の一節を引用した。ここで言及されているのは特に15世紀前半の状況である。

> 我われは今や文芸活動の価値を認める社会（少数派のエリートのレベルでだが）に向かい合っている。その社会では，詩人たちがお互いの活動を知っている。一方，14世紀には，正反対に，俗語の書き手たちは，おおむね，他の書き手たちから孤立して執筆しており，ヨーロッパのスコラ学的伝統にのみ根ざしていると自己認識していたのである。（…）これが15世紀を，その前の２世紀からも後の２世紀からも際立たせる特徴である(42)。

15世紀のカスティーリャにおいて母語でものを書いた人たちが書き手としての自意識を徐々に高めていったことがわかる指摘である。15世紀は，特にカスティーリャの場合16–17世紀の黄金時代の華々しさと比較すると，政情は不安定で動乱が相次ぎ，文芸においても中世的色合いをまだ残す，一見すると地味な時代である。しかし，政治・社会・文化などのあらゆる面で後の飛躍的発展を可能にするような地殻変動や数々の刷新的な現象が起こった，実に興味深い過渡期である。

---

(42) Deyermond, Alan, “Las relaciones literarias en el siglo XV”, en *Actes del X Congrés Internacional de l’Associació Hispànica de Literatura Medieval, Vol. I,* edició a cura de Farael Alemany et al., Alacant,p. 73, y *A Literary History of Spain. The Middle Ages,* London, 1971, p. 182.

本稿では，後世に大きな影響を及ぼすことになった，15世紀前半における俗語および叙情詩定型化の試みを素描するのが精一杯だったが，この問題についてだけでもまだ掘り下げるべき点がいくつもある。具体的に言うと，サンティリャーナが特に強調した風雅，すなわち，ことばの美の探求といった「愉しく面白いことども」を貴族の教養として一般化しようとする気風が生まれたことである。これは，アルフォンソ10世の定義にまでさかのぼって論ずるべき問題であり，本稿では論じることができなかった。また，15世紀には，貴族が叙情詩を大量生産する傍らで，庶民たちも歌っていた。カスティーリャ語の本質的韻律ともいえる 8 音節から成るロマンセ（romance）の流行である。サンティリャーナの詩論が，単なることばや詩の本質を擁護するのにとどまらず，貴族の新しいアイデンティティの一環を成すものとしての詩の価値を創出し，候がプロヴァンスやガリシア－ポルトガル詩との伝統からの訣別を宣言することによってカスティーリャ詩の価値がいっそう強調されたとすれば，詩を普遍というマクロの枠内で階層化する際の重要な一要素として，ロマンセもサンティリャーナの構想には含まれていたはずである。これを考察することは即ち，本稿では言及するにとどまったサンティリャーナによる韻律の洗練度の階層化についての，より大きな視野に立った検討が必要になるであろう。